

薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ・・・



2024年
7月2日
第165号



クリ（ブナ科）

北門から入ったすぐ西側で、トゲの付いた総苞が大きくなっているのが見られます。日本原産の落葉高木で、縄文時代から栽培され、果実を食用とされてきたほか、建築用の木材として利用されてきました。総苞はクリの雌花にある子房が熟したもので、さらに成熟すると4つに分かれ、内部に1～3個の堅果が見られます。木質化した堅果の皮を剥いて得られる、渋皮に包まれた部分がクリの種子で、これが可食部となり、栗きんとん、甘栗、甘栗などに加工されます。クリの種子は、日本の民間薬では健胃を目的に使用されることになっていますが、実際は食用ですね。

薬用となるのは、中国原産のチュウゴクグリ（別名シナグリ）のほうで、種子が栗子（リッシ）として滋陰補腎、葉が栗葉（リツヨウ）として宣肺止咳、樹皮が栗樹皮（クリジュヒ）として解毒消腫を目的に、中医学で使用されます。

ハマオモト

（ヒガンバナ科）

今、温室の中で白い花が咲いています。沖縄からインドネシアにかけての熱帯アジア地方原産の多年草で、房総半島から九州、沖縄にかけての太平洋側の沿岸部で自生しています。別名、ハマユウとも呼ばれ、日本語の漢字で「浜木綿」が当てられています。漢名は「文殊蘭」です。文殊蘭（モンジュラン）は、ハマオモトの葉または鱗茎を原料とする生薬名でもあり、中医学で行血散瘀、消腫止痛を目的に、咽喉炎、乳腺炎、腰痛、関節痛などに内服、または带状疱疹、打撲傷、蛇噛傷などに外用しますが、ヒガンバナ科に分布するアルカロイド、リコリンを本植物も含み、そのままでは激しい嘔吐を起こしたり、多量に内服すると致死することもあるため、実際には水によくさらして乾燥させたものを使用するそうです。